

開催された。試料として一般生菌、大腸菌、大腸菌群、黄色ブドウ球菌などを接種した冷凍ポタージュスープが送付され、サーベイ参加者は一般生菌数の定量検査、大腸菌群・大腸菌・黄色ブドウ球菌の定性検査を実施した(試料は日本食品分析センターが調製)。

セミナーでは日本食品分析センターの齋藤明美氏がサーベイの総評を行うとともに、均一な試料を調製する重要性、培地調製時の注意点(使用水、加熱温度、pH、培地の使用期限など)、培養時間を遵守することの重要性、コロニーカウント時に集落を見落とさないためのコツ、コロニー数の計算(データ処理)で間違いやすい点など、検査実施時の留意点について概説。また、齋藤氏は「適切な判定をするためには、使用培地の原理や特徴などを理解することも必要」「サーベイの結果に一喜一憂するのではなく、検査のバラツキの傾向などを把握し、自分たちの検査室の現状把握や改善につなげることが肝要」とアドバイスを送った。

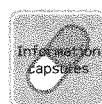


栄研化学の精度管理セミナー

また、東京海洋大学食品微生物学研究室の高橋肇准教授が「微生物迅速検出法の現状と展望」と題して特別講演を行い、PCR法など遺伝子手法を中心に講義。また、近年「最も迅速な微生物同定法」として注目されている

MALDI-TOF MSにも言及。同法は、菌体のタンパク質をターゲットとした質量分析によって同定を行う手法で、測定から同定までを数分で行うことができることから、さまざまな菌種で評価が行われている。新しい手法のため、データベースの構築などで課題は抱えているが(例えばマイナーな菌を正確に同定するには近縁種のデータベースの充実が必要である点など)、その簡便性・迅速性から今後の可能性に期待が寄せられている。

なお、栄研化学では2020年度も精度管理サーベイを実施予定。詳細は決まり次第、ウェブサイトなどで公開される(<http://www.eiken.co.jp/>)。



基盤コースを初開催、講義&実習で感染制御を学ぶ

生物安全実践講習会



吉川敏一氏



堀田国元氏

ルイ・パストゥール医学研究センター(吉川敏一理事長)と機能水研究振興財団(堀田国元理事長)は、共同公益事業の一環として「生物安全実践講習会」(Practical Biosafety Forum: PBF)を創設。2月25日に京都市左京区のルイ・パストゥール医学研究センターにおいて、キックオフ講習会となるPBF「生物安全基盤コース」の第1回講習会を開催した。

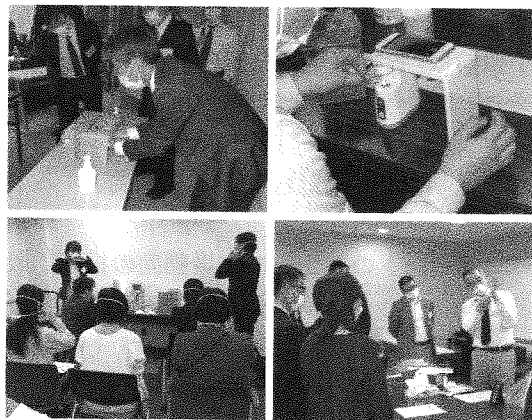
感染症は「病原体」「感染経路」「宿主(ヒト)の感受性」という3要素が揃った時に発生する。言い換えれば、この3要素のいずれかを断ち切ることが、感染症の発生を予防する手

段となる。PBFでは、これら3要素に関する確かつ最新の知識および対処技術を身につけることを目的に、国立感染症研究所OBなどの協力の下、ワンヘルス(後述)に基づく独自のカリキュラム(座学と実習)が実施された。

講習会では冒頭、主催者を代表して吉川敏一氏が「本日、記念すべき第1回を迎えられたことを喜ばしく思う。受講者の皆様には、微生物制御や感染制御の基礎や、現時点での最先端の知識を学んでいただくとともに、職場や関係者に正しい知識を伝えていくという役割にも期待している」と挨拶。続いて堀田国元氏が講習会内容のガイダンスを行った後、座学講義として元国立感染症研究所の木ノ本雅通氏が「感染症概論」、大阪医科大学医学部の中野隆史氏と元千葉県家畜衛生研究



COVID-19 流行が報道されるなか、スタッフ・受講生は全員、マスクを着用



実習の風景。左上から時計回りに衛生的な手洗い、スマホで観察する顕微鏡、ATP ふき取り検査、マスクの着脱

所の吉澤重克氏が「病原体概論(細菌類、ウイルス)」, 機能水研究振興財団の本間茂氏と東京医療保健大学の岩澤篤郎氏が「感染防御概論(感染経路対策、消毒・滅菌法)」を担当。主に施設内感染対策を中心に、病原体やその感染経路、感染防御の基礎知識を学ぶ講義が行われた。また、感染症対策の最前線で活動する京都府立医科大学附属病院の藤田直久氏が、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の基礎知識や最新動向を解説する記念招待講演を行い、タイムリーな話題に受講生は熱心に聞き入っていた。

実習では、感染症対策にとって重要な、的確な手洗いや防護具の着脱、洗浄・消毒などが行われた。今回は、サラヤの加藤信一氏が手洗いチェッカー(蛍光ローションとブラックライトを用いた手洗い効果の確認ツール)を用いた「衛生的手洗い(手指に付着したすべての汚染菌を除去する手洗い)」, アクアシステム(株)の狩野清史氏がスマートフォンで見える携帯顕微鏡を用いた生細菌の直接観察、興研の清水絵理子氏がマスクの正しい着脱方法、元キッコーマンの本間茂氏が簡便・迅速・高感度な環境のチェックツールであるATPふき取り検査法を用いた手洗い効果や環境表面の洗浄度(汚染度)評価などを担当した。

PBFは、食品や医療など特定領域を対象とするのではなく、「ワンヘルス」の考え方(ヒト・環境・動物・食品は相互に関連し合うので、それらすべてを良い状態にすることで『真の健康』が得られるという考え方)に基づいて座学と実習が組み込まれている点が、他の講習会と大きく異なる。PBFでは今年上半期を目安に第2回の基盤コースの開催を検討しているほか、さらに専門的なコースの開催に向けて準備を進めている(詳細は順次、ウェブサイトにて公開)。